

## 北海道余市紅志高等学校

課程 全日制  
学科 総合学科  
生徒数 222名

### 1 取組の特徴

平成22年度に管内唯一の総合学科として開校し、1年次生徒に必修科目「産業社会と人間」を学習させている。この科目の単元目標に、「キャリア教育の充実」と「コミュニケーションスキルの育成」を設定し、生徒のキャリア発達の向上を図った。

また、1年次の「総合的な学習の時間」に、コミュニケーション能力育成のトレーニングを計画的に取り入れた。

### 2 取組のねらい

人間関係を上手に構築できないことにより不安定な心理状態となり、高校生活を有意義に送ることができない生徒に対して、授業や地域との交流、ボランティア活動等を通じてコミュニケーション能力を向上させることを目的として、取り組んでいる。

#### <組織図>



### 3 取組の経過

4月 コミュニケーショントレーニング  
通学路清掃  
5月 宿泊研修  
「構成的グループエンカウンター」  
6月 コミュニケーショントレーニング  
アサーショントレーニング  
余市養護学校での花壇作りと運動会ボランティア  
7月 第1回アセスの実施  
ピア・サポートトレーニング  
学校祭  
障がい者施設との交流会と幼稚園の花壇整備

7月 スクールカウンセラーによる支援が必要な生徒に対する面談  
8～12月 進路学習を通しての自己理解・他者理解  
9月 障がい者施設との交流会  
体育祭  
11月 余市養護学校との交流会  
12月 総合学科発表会  
球技大会  
余市養護学校との交流会  
1月 専門家による教員研修会の実施  
第2回アセスの実施

## 4 取組の内容

### 1 コミュニケーショントレーニング

(1) ねらい エンカウンターやワークショップ、ワークシートの作成などを通して、自己理解・他者理解を深め、円滑なコミュニケーションやアサーションについての意識を高める。



(2) 対象 1年次

(3) 日時及び内容

ア 4月18日 「自己理解」

ワークショップで自己表現を行いながら、自分を理解する。

イ 4月25日 「他者理解」

クラスメイトにインタビューをしてお互いを知り、相手の気持ちを考える姿勢を身に付ける。

ウ 5月2日 「スクールライフプラン」

ワークシートへの記入を通して、高校生活をどのように過ごすのか、ライフプランを計画する。

エ 5月14日～16日 「宿泊研修」

構成的グループエンカウンターを実施する。

オ 6月13日 「コミュニケーショントレーニング」

グループワーク「怒りについて考えよう」を通して、他者を尊重する意識を高める。

カ 6月20日 「学校祭に向けて」

ワークシート「今日、輝いてた人」の作成やインタビューを通して、円滑なコミュニケーションの意識を高める。

キ 6月27日 「学校祭に向けて」

アサーショントレーニングを通して、実際の学校祭準備活動の中で、相手に対して思いやりを持った行動ができるようにする。

ク 7月4日 「コミュニケーショントレーニング」

ワークシートの作成とグループワーク、ロールプレイ「拒否的な聞き方、受容的な聞き方」を通して、好ましい相談の受け方を考える。

ケ 7月11日 「ピア・カウンセリング演習」

外部講師によるピア・カウンセリングの講義と演習を実施する。

(4) 成果と課題 年度初めからの計画的なコミュニケーショントレーニングを通して、生徒の人間関係能力やコミュニケーション能力の育成を図ることができた。1年次の保健室者数、不登校生徒数はともに減少した。

### 2 ボランティア

(1) ねらい 生徒会やボランティア事務局と連携して全校的にボランティア活動に取り組むことで、奉仕の精神や共同の意識を養う。

(2) 対象 全年次



(3) 日時及び内容

- ア 4月26日 春の通学路清掃活動
- イ 6月9日 余市養護学校「運動会」
- ウ 6月12日 余市養護学校「花壇苗作り交流会」
- エ 6月23日 余市町のボランティア講習会
- オ 7月7日 ぽればれペンギンクラブ「ソーラン祭り仮装パレード」
- カ 7月15日 大江学園祭「花菖蒲祭り」
- キ 7月22日 仁木長寿園・やすらぎの里祭り  
余市町ウィークエンドサークル「海水浴と地引き網体験」
- ク 7月31日 リタロード花壇管理（水まき・花摘み）
- ケ 9月12日 余市豊浜学園「秋祭り」
- コ 11月24日 障害のある子と遊ぶ「ムーブメント体験」
- カ 12月9日 余市養護学校「もちつき体験」

(4) 成果と課題 回数を重ねるごとに参加生徒が増加している。生徒たちは、年次の枠を超えて人間関係を深め、幼稚園からお年寄りまで幅広い年齢の方たちと触れ合うことで、ボランティア活動に喜びを感じている。

ボランティア事務局が主体の活動であり、参加している生徒は限定されるため、分掌や年次、生徒会との連携を図り、全校的な取組に広げていくことや、コミュニケーション学習とのつながりを持たせることでより多くの生徒が自己有用感を持てるようになることが課題である。

### 3 学級適応検査等の状況

(1) ねらい 年2回実施することで、さまざまな活動の事前と事後での集団適応状態を把握するとともに、支援を必要とする生徒の支援に役立てる。

(2) 対象 1年次

(3) 日時 1回目：7月4日実施、2回目：1月18日実施

(4) 分析結果 生活満足感、対人的適応では、要支援群の生徒は減少している。学習的適応では、8.0ポイント増加しているが、これは、学習が進むにつれて内容が難しいと感じている生徒が増えているが、教師や友人のサポートをしっかり受け止めていることから、生活満足感が高まっていると考えられる。

| 適応次元  | 要支援群生徒(7月) | 要支援群生徒(1月) | 増減( )   |
|-------|------------|------------|---------|
| 生活満足感 | 12.0%      | 8.0%       | 4.0ポイント |
| 対人的適応 | 6.0%       | 4.0%       | 2.0ポイント |
| 学習的適応 | 2.0%       | 10.0%      | 8.0ポイント |

(5) 成果と課題 生徒一人一人の適応度を把握することができるため、支援を必要とする生徒に対して、スクールカウンセラーによる個別面談を実施することができた。しかし、教職員の研修会を実施することができず、授業や学校行事等の活動に活かすことができなかった。教職員の研修の機会を確保することと、早い時期に適応検査を実施することで、学校の様々な場面で生徒理解に活かすことができる。

## 5 次年度に向けて

### 1 成果

(1) 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

本事業の取組により、中途退学者数及び不登校生徒数ともに大幅に減少している。

(2) その他の指標による評価

保健室利用者数は昨年度より150件減少している。頻回来室者が周囲のサポートを受けて教室に適應した結果、来室数が減ったことによる。また、1日当たりの欠席数についても昨年度より減少している。

(3) 子ども理解支援ツール「ほっと」の実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

今年度は、「ほっと」の活用に係る教職員研修の実践及び次年度の活用計画の作成に終始し、活用・分析までは行えなかった。7月と1月に実施した適應検査では、特に、「向社会スキル」が大きく向上した。

(4) 生徒の変容した姿

入学後の早い段階でコミュニケーションスキルトレーニングを取り入れた1年次においては、良好な人間関係を築くことができている。

### 2 課題

(1) 子ども理解支援ツール「ほっと」を有効に活用しきれず、教員全体の生徒理解につながるものにならなかった。

(2) 1年次に限定した取組が多く、学校全体の取組になっていないため、分掌・サポート委員会が一層連携を図り、全年次の取組をサポートするために、教員の支援体制作りが必要である。

### 3 次年度に向けて

(1) 校内研修をより充実させ、子ども理解支援ツール「ほっと」の効果的な活用法に向けた研究を推進するとともに、教員が「ほっと」をもとに、生徒の実態を把握し、適切な指導ができるようにする。

(2) 構成的グループエンカウンターやピアサポーター養成のため教員のスキルアップ研究会を実施する。